
あの世

こめ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの世

【Nコード】

N8614B

【作者名】

こめ

【あらすじ】

ある日、横断歩道で車にはねられた男。
目覚めてみると辺り一面なにもない世界。

そこに神を名乗るオヤジと、なぜか二人のバニーガールも現れて…。

抱腹絶倒のドタバタ劇！

（多少下品なギャグもあります。下品なギャグが苦手な人は注意して下さい）

一人称で書かれてありますが、作者はこんな人間ではありません。
完全なフィクションです。

遭遇（前書き）

お気軽に評価のほどを。

遭遇

死んでしまった。実にあっけなく、二十四才で死んでしまった。大音量のダンス・ミュージックが流れるCDプレイヤーのイヤホンを耳にさしてパチンコ店へ向かう途中、横断歩道で車にはねられたのである。

赤信号に気がついたのは後頭部をアスファルトの地面へしたたか強打して仰向けの状態、薄れいく意識の中でだ。

こんなんじや事故に遭うのも当然といえよう。不注意の自業自得。誰にも、文句はつけられない。

そして次に目覚めた時、俺は辺り一面真っ白な何も無い所にいた。ああ、死んでしまったんだなあと、思ったのである。

いや、確信したといったほうがいい。理由はこれといってないが、そうなのだから仕方ない。

無理矢理でかまわないのなら第一にこの目の前に広がる異常な光景と、第二に動物的本能であろう。

俺はとりあえず当てもなく歩き出した。これも正確には足が勝手に動き出した。

己の魂を引きつける強力な磁場へ向かうが如く。

どれくらい歩いただろう、距離も時間も何も分からないがやがて前方に黄金色に発光する扉のようなものが見えてきた。

そこまで行って俺はぼかんと大口をひろげ立ち止まる。

扉状のものの大きさは縦二メートルで横が七十センチといったところ。ノブはついていない。

使用目的が、不明である。後ろには何もない光景が広がっているのだ。

家の建築中ではなからう。扉から作るわけがない。

まあ、だからといって別にどうでもいいことではある。他に何も

ないから仕方なく見ているだけだ。

と、とつぜん扉状のものがばたあぁあぁんと大きな音を立てて開いた。

俺は喫驚仰天してひっくり返った。

奥のほうから「はやくなかに入ってこい」と、声がする。

「腰が抜けて、立ち上がれません」俺は目に涙を浮かべて言った。なぜか、敬語である。

「しょうがない奴だ。おい、行って連れてこい」扉の向こうの何者かがそう命令すると、金髪のバーナードが二人飛び出してきた。「うわっ。な、何なんですか、あなたたち」俺は両脇をバーナードの美女に支えられてどぎまぎした。

豊満な乳房が体に密着し、フェロモンを含んだ香りが鼻をくすぐる。本来なら嬉しいはずである。しかし、この異常な状況下だ。混乱してしまう。

どうして死後の世界にバーナードがいるというのだ。不自然に過ぎる。そんな話、生前には一度も聞いたことがない。

もしかして俺は死んでいなくて、ここは地球上のどこかの場所なのか。

美女二人にずるずる引きずられながら、あれやこれやひたすらに考え続けた。

おかげでこの二人の美女に命令を下した者のところへ到着したところにも気づかなかった。

「おい、何をひとりでぶつぶつ言っておる」

どうやら、独り言を呟いていたらしい。

「いえ、意味もないただの」申し開きしながら俺は顔をあげた。

外と同じく真っ白な場所。四十がらみのオヤジがフンドシー丁で寝っ転がっていた。

禿げ頭で、太鼓腹。周りに散乱した酒瓶から察するに多少酔っているのだろう。頬が、赤い。

「なぜ俺を呼んだ。てめえはいつたい、何者だ。ここはどこだ」俺

はぶつきら棒に言い放った。

心中、怒りがむらむらと込み上げてきた。こんなオヤジから偉そうに呼びつけられたくはない。

「ここか」オヤジは欠伸しながら生返事をした。「ここは死後の世界。つまり、あの世じゃ」

「ひえええ」もしやと、淡い希望を持ち始めていた矢先である。俺はその場に泣きくずれた。「やはり俺は、死んでしまったんだああ」

「そうじゃそうじゃ。おぬしは死んでしまった」俺を指さして何度も大きく頷く。

つづいて「わははははっ」と、腹を抱えて大爆笑。

そこで俺は我に帰った。ひいひい言いながら地面を転げ回っているオヤジに詰め寄る。

「なんで、てめえにそんなことが分かる。ここがあの世だなんて証拠は何もないじゃないか」

オヤジは今だ笑いの発作が治まらないらしい。

「ああ、それはじゃな」ひく、ひくと間欠的にしゃくり上げている。

「おぬしが発した残りの質問に答えれば明らかとなるぞ」

「どういうことだ」俺は、もはやこのオヤジをぶん殴ってやりたい衝動に駆られていた。「納得のいく答えが返ってこなかったら、承知しないぞ」

「まあ、落ち着け」オヤジは前に突き出した両の手で俺を制した。

「なぜ、ここがあの世であることが分かるかというと」

「分かるかというと」オウム返しに言っつて、俺はごくりと唾を飲み込んだ。

「ワシが」オヤジは一瞬間を置いてから叫んだ。「神様だからじゃあああ」

その勢いに気押されて俺は「ぎよろっこ」などと意味不明な言語を思わず発し、またぞろ後ろにもんどり打ってひっくり返り腰を抜かした。

オヤジは立ち上がり、そんな情けない俺の姿を悠然と見おろす。

「だからおぬしをここへ呼んだというわけじゃ」

「嘘だ」

「嘘ではない」オヤジの口調は断定的であり、しかも、真顔だ。

有無をいわせぬ圧倒感が体から漂い出した。目の錯覚で、オヤジが何倍にもでかくなつたかのよう。先ほどまでのふざけた様子がまるでない。

そこには確かに人間離れしたものがある。

俺は、啞然とした。

「信じて貰えんかのう」

「なら、証拠を見せてくれ」喉の奥から言葉を絞り出す。

事故つたあとに目覚めた場所も場所だ。最初に確信した通り俺は死んでいて、そしてここはあの世で、もしかしたらこのオヤジが神様かもしれない。

「証拠、じゃと」

「たとえば、うううん、そうだなあ」俺は顎に手をやって考えた。タネも仕掛けも出来ず、それでいて人間にはとても不可能なことを「空中浮遊なんて、どうだ」パツと頭に閃いた。「今すぐに俺の目の前でやってくれ。そうしたら信じる」

「なんじゃ。そんなことか。御安いご用よ」オヤジは首を左右に振ってぼきぼき鳴らし、両脇のバニーガールを払い退けた。「では、いくぞ」

体が、宙に浮く。

「おおおおっ」俺はのけぞりながら嘆声を上げた。

オヤジはみるみる上昇していき、ついには地上二十メートルほどの位置へ到達。そこで座禅を組み、宙を右へ左へ滑らかに移動してみせる。

俺は、言葉もない。目が点だ。

そんな俺を見て気を良くしたのだろう、オヤジは両手足を広げたムササビのような格好でぐるぐるぐるぐる旋回までやり始めた。

急降下し地面スレスレまできてふたたび上昇。またぐるぐる回るなんて芸当も披露する始末だ。

ここまでくると空中浮遊ではなく、飛行である。フンドシからは金玉がはみ出していた。

俺はうんざりして言った。「もういいから、降りてきてくれ」

神様のくせに声が聞こえないらしく、オヤジは微妙な笑みをたたえたまま空中を飛び回り続けている。フンドシは完璧に緩み、局部が丸出した。

俺は、ぶちキレた。

「降りてこいと言ってるだろうがあああああ」みずからの鼓膜が破れんばかりの大声で怒鳴った。

オヤジははつとして上空から俺に顔を向けた。どうやら、今度は聞こえたらしい。

「おお。すまんすまん」ゆっくりと地上に降りてきた。「どうも何かをやり出すと夢中になってしまったちでな」

ぺろりと舌を出し、恥ずかし気に頭を掻いた。

こいつは九十九パーセント神様に違いない。俺の疑念は、ほ

ぼ消え去っていた。

今、目の前にいるオヤジのしたことはどう考えても人間技ではないからだ。少なくとも俺の知っている範囲内では空を飛ぶ奴なんてひとりもない。

しかし、逆に言い替えるとまだこのオヤジを百パーセント神様だと認めたわけでもない。マジックの可能性を捨てきれないからだ。とてもそうは見えなかったが、いちパーセントほどの疑惑は残る。

俺はオヤジにもうひとつ無理難題をふっかけることにした。

「それじゃあ、次は俺を浮き上がらせてくれ。空中浮遊がしたい」これが出来れば、本物である。俺にはタネも仕掛けもされてない。本人が、いちばんよく分かっている。

「さあ、今すぐ頼む」

「よかるう」

意外にもオヤジは即諾した。少々、ためらったりすると思っただのだ。

「では、いくぞ」しかつめらしい面持ちである。「心の準備はいいな」

うん、と返事をする前に俺は地上五十メートルほどの位置に達した。それは浮かび上がるといっても弾丸のように飛び上がったといったほうがいい。なんせその勢いで服は所どころが裂け、あまりの空気圧に俺の顔は一瞬ひしゃげたくらいである。

失禁した。

「ありがとう。うん、もういい。降ろしてくれ」俺は哀願する。

完璧に脱力してしまい、手足をだらりと垂らした状態だ。まるで張りつけにされた死体みたいなもの。なにも、楽しくない。

「聞いているのか。俺をここから」

オヤジは無邪気な笑顔で俺に手を振った。聞えていないのである。俺は、戦慄した。さあああと音を立てて顔から血の気が引いていく。

この距離から蚊の鳴くような声が地上に届くわけがない。おそらくオヤジには俺が口をぱくぱく動かしてることもぐらいいしか確認できないであろう。

だからといって今の俺にはこれが精一杯だ。やばい。

「お次は、例のやつをいくぞ」ラッパのかたちに重ねた両の手を口に当て、オヤジはバカでかい声でそう言った。

「それ」俺に向かって伸ばした腕をぐるんと回す。

その腕の動きに合わせて、俺の体もぐるんと大回転。

「あ、それぞれ」オヤジは小躍りしながら腕を振り回しつづける。

「ぎゃあああああ」俺はまばたきもせず空中をマッハの速さで旋回した。

あまりの恐怖に体中の穴という穴がすべて開く。

もうダメだ。死ぬ。　　いったい俺は何度死ねばいいのだろう。

それにしてもあのオヤジは……。ここは……。

俺の頭の中をさまざまな想いが走馬灯のように駆け巡った。意識が、途切れ途切れになっていく。

対応

気がつくと、俺はいつの間にか地面に寝そべっていた。どのくらいこうしていたのだろう。

まだ、だいぶぼうとする頭。視界にあるものは、何だ。あまりにも近すぎる。

鼻のもげそうな加齢臭に中年男性の荒い息づかい。肌をさすのは無精髭。

そうだ、これはオヤジの顔面のドアップだ。

――たちまち俺は正気づいた。神と名乗るオヤジに人口呼吸をされていたのである。

「な、なにをしてるんだああああ」オヤジを下から突き飛ばし、口をぬぐう。「てめえ、このホモ野郎」

「痛たたたっ」背中を地面に打ちつけたオヤジはバニーガールの二人に腕をひっぱられて、起き上がる。「神の慈悲も分からぬか。おぬしがあぶないと判断したからやったまでのこと。けっして、趣味ではない」

「なら、その二人にさせればいいじゃないか」俺はバニーガールに向かって顎をしゃくった。

「こやつらに、そんなスキルはない」オヤジは四つん這いで俺に近寄ってくる。

酒のせいにしろ頬が赤いのは発情している様であり、しかも、金玉までモロ出しなのだ。四十オヤジのホモにしか見えない。

俺は、貞操の危機を感じた。

「うわあああ。く、くるなあ」横座りの体勢であとじさる。

「なにをそんなに、脅えておる」唇をとがらせるオヤジ。

すねているつもりなのか、接吻を求めているのか、俺には判別できない。

恐慌をきたして、声を張り上げた。「いやだいやだいやだあ。男

には興味がない。女がいい。可愛娘ちゃんがいい。俺は、ノンケなんだあ」

「ワシも、ノンケなんじゃあ」オヤジは肥満体にあるまじき跳躍力でぴょんと跳ね上がった。

俺の眼前に豚の如き巨体。つづいて呼吸が止まりかけるほどの強烈な衝撃。

「ぐほっ」九十キロはあろうかというオヤジに押し潰され、俺は白目を剥いた。

「やつ、しまった。大丈夫か」オヤジは俺の肩を掴んでゆさぶる。「かくなるうへは、責任を取って」

ふたたび唇をとがらせ顔を近づけてきた。

切れかけていた意識が、すぐに戻った。このオヤジと唇を重ねるのは死んでもイヤだ。

俺は力まかせにオヤジの下半身へ蹴りを入れる。

「ぶはっ」よほどの確にヒットしたのだろう。今度はオヤジの方が白目を剥いた。

俺のかたわらで股間を押さえ、うずくまる。

オヤジの腰の辺りを叩いてやつたり、背中を擦ってやつたりするバニーガールたち。

「やつぱり、そういう趣味だったんだな」俺は立ち上がってから罵倒した。「このホモオヤジめ」

「ご、誤解じゃ」ふうううつと切な気に息を吐いてオヤジは俺をふり仰いだ。「ワシのせいでおぬしが死んだら一大事。夢見も悪い。だから男と接吻なんぞしたくはないのを、我慢して」

「そつだ、二回ともお前のせいだ。そしてかならず自分で責任を取ろうとしやがる。唇で。だいいち、ここがあのだと言ったのはお前じゃないか。なんで死ぬ道理がある。無茶苦茶だ。そのへんのところをぜんぶ説明しろ」

「わしは口ベタなんじゃ」

「そんな言い逃れが通るわけないだろ」俺はオヤジの首を絞めた。

「説明しろ説明しろ説明しろ」

「うおつ。ぐぐぐつ」オヤジは手足をバタつかせる。アルコールが入っているもんだから顔はこれ以上ないというくらいに真っ赤かだ。「は、離さんか。これでは、説明、が」

いっそのことこのまま絞め殺してやろうかとも思った。が、俺はバニーガールの二人に服を掴まれあえなくオヤジから引き離されてしまった。

まあ、これでよかったのだろう。どのような説明をするのか、見ものである。それを聞かないうちは胸の毛や毛が収まらない。

オヤジはごほごほと咳込んだ。

「なにかから話せばいい」

「だから何で」

「おお。そうじゃった、そうじゃった」うへとオヤジはえずいた。

「空中浮遊と、おぬしを押し潰した件な。あれはワザではない。

粗相じゃ、粗相。むろん悪いのはワシのほう。すまん」

「そのあとの人口呼吸は、どういうことだ」俺は声を荒げる。「ふざけているのか」

「違う。おぬしがあぶないと判断したからやったまで。それは先ほど」

「他に方法はないのか」俺はオヤジが喋っている途中で地面をどすつと踏み鳴らした。「お前は神様なんだよな。そう自称したよな。

だったら魔法みたいなものを使えばいい。なぜ、そうしない」

「あれがそうじゃ」オヤジは平然としたもの。「ワシの人口呼吸は蘇生率百パーセント。あれ以外に、方法はない」

わお、と叫んで俺は飛び上がった。「じゃあ、ここがあのだというのは何なんだ。嘘なのか」

「ワシが神様だから」オヤジは俺の理解力に少し呆れたといった感じで嘆息した。「ここはあの世に決まっておるうが」

「蘇生は生き返らせるって意味だろ」俺は髪の毛を掻きむしる。「ここがあのだなら、死ぬことはあるのか」

「ある」オヤジは言下に答えた。「実際おぬしは死にかけたではないか。身をもつて、知ったはず」

「ああ、死にかけたさ。たしかに死ぬと思ったよ」オヤジにひとさし指を突きつける。「じゃあ、死んだら俺はどこへ行くんだ」

「あの世じゃ」

「ここがあの世なんだろうが」

「そうじゃ。だから死んだら、またここへやってくるんじゃない」

「へっ」俺は阿呆のように表情を弛緩させた。「死んだらあの世へ行く。だから、またここへやってくるだって」

「うむ」オヤジは目を閉じて大きく頷く。

「それはつまり俺が最初に目が覚めたところへ、ってことかなのか」
へなへなとその場に崩折れた。「そうなのか。答えろ」

オヤジを横目に、俺はかぶりを振った。

「いや。やっぱり答えなくていい。どうせそう答えるに、決まっている」ますます力が抜けていく。「事故ったあと、俺はあそこにいたし。そしてあんたが人口呼吸をした理由は俺を死なせないため、ね。神が不注意で人を殺すわけにもいかないだろうから。うんうん。蘇生率百パーセントの魔法の人口呼吸」

水平線の彼方をぼんやりと見つめた。

「理屈は、通っている。通っているよ。俺が馬鹿だった。何も分かってなかった。あひゃひゃひゃひゃ」反論したくても反論のしようがない。なぜか俺は笑い出した。

笑いが止まらなかった。笑いながらぼろぼろと涙をこぼした。

正体

そんな俺の肩をオヤジが軽くぽんぽんと叩く。気を使ってくれたに違いない。

オヤジは口を開いた。

「おぬしらの世界の尺度でここを計るのはたいへんじゃ。ひとつひとつ覚えていけばよい」

「うんうん」俺は目頭を拭った。

この涙は何の感情によるものなのかは自分でもさっぱり分からない。

バニーガールの二人もやってきて、両側から俺の太股を叩き始めた。こっちの方は事務的である。能面とみまごうばかりの無表情。

叩きかたも、雑だ。

「ありがとう。もう、なぐさめてくれ、な」くらっと、俺は目眩を起こした。

「どうした」すかさずオヤジは心配そうに唇をとがらせる。

俺の腹がぐうつと鳴った。

「考えてもみたら、長いこと食事にありついていない。死ぬ前日にインスタントラーメンを食ったきりだ。やたらと体も動かしたし、腹と背中がくっついちまう。ごちそうしてくれ」

「ごちそう、とな」

「ああ。さっき責任を取ってくれるとか言っていたが、その代わりに飯を腹いっぱい食わせてくれるだけでいい」

「なんじゃとう」オヤジは片方の眉を吊り上げて額にシワを刻んだ険しい顔で仁王立ちとなった。頬がびくびくと痙攣する。

これはマズい。オヤジの首を絞めた直後に図々し過ぎたか。そう思い、俺は大慌てで訂正した。

「いや、できればってことなんだ。できればって。そうして貰えたら、うれしいかな、なんて」

「ふんぬばら」と、オヤジは右腕を振りかざした。

「ひゃっ」俺は頭を抱え込んだ。ぶん殴られるのを覚悟したが、オヤジは俺とまるであさつてな方向に体をひねり、指をパチンと弾く。「そこにいでよ、キッチン」

腕を伸ばした先にぼわんと白煙が立ち昇る。

「おおおっ」俺はぶつたまげた。

なんとそこには周りと同化するような真っ白い長方形の建物が現れているではないか。これこそイメージ通りの魔法だ。

オヤジは俺に満面の笑みを向けた。

「腹がへっているならへっているで、なぜもつとはやく言わん。もう、いやねえ」

なぜか少しオカマキャラになっている。これはたぶんギャグのもりなのだろう。どっちみち気持ちの悪いことに、変わりはない。

俺はオヤジにたずねてみる。

「キッチンと叫んだように聞こえたが、あれは、もしかして……」

「ご明答」オヤジはウインクした。「楽しみに待っておれ。主婦の意地にかけて、ぜったい満足させるわ」

いそいそとキッチンの中へ入って行った。

バニーガールの二人がぱちぱちと拍手を送っている。

やがて、油の投入された中華鍋をあやつるような音。

俺はバニーガールに話しかけた。

「なあ、あんたらしいって何なんだ。あのオヤジが神様だとしても、あんたらの存在意義というか正体というか、それがいまいちよく分からない。召使みたいなものなのか。現世でバニーガールをやっている、あのオヤジに気に入られたとか」

料理が出来るまでの暇潰しと、最初からの疑問である。

バニーガールの二人はそろって俺に顔を向けた。相変わらずの無表情。質問に答える気配すらない。

「まさか、あんたらも神様じゃないよな。女神様」俺はことさら軽薄な調子で喋り続ける。このほうが彼女らも取っ付きやすいだろう

との計算からだ。「いや、発想の転換で悪魔ってことも。なんてね。あははは。あっ」

俺は自分の発した言葉にぞっとした。なんてことだ、今の今まで考えもしなかった。その可能性もあったのだ。

俺は重い腰をあげてバニーガールたちに歩み寄る。

「尻を見せる。悪魔なら先のとがった黒いシツポが付いているはず。いやらしい気持ちからではない。確認だ」

まさに脱兎の勢いでバニーガールの二人は逃げ出した。

元が人間の女なら、今日会ったばかりの男に尻を見せるわけがない。悪魔なら悪魔で正体を知られたくはないだろうし、女神様にしたって威厳がまる潰れた。

どっちにしたって逃げ出すに決まっている。

俺は追いかけた。

「尻を見せる尻を見せる尻を見せる」

客観的には変態そのものである。しかしここは死後の世界。なにかまうものか。

俺とバニーガールたちはキッチンの周りをぐるぐる、ぐるぐる駆け続けた。

体調が万全なら女の足なんかには負けやしない。すぐに捕まえきれたはずである。

が、俺は空腹状態。差は開き、バニーガールたちの姿が角に消えた。

「くそう」またしても目眩を起こして、俺は地面に膝をつく。「逃げられちゃった」

くやくして歯がみした。――その瞬間である。俺はどんと後ろから衝撃を受けて突っ伏した。

「痛ててて」振り返ると、そこにはバニーガールの二人も倒れている。

俺もバニーガールたちも気づかなかったのだ。一週遅れである。「このやろっ」俺はバニーガールのひとりに踊りかかって行った。

足を捕え、レオタードに手を伸ばす。

それを必死に打ち払うバニーガール。

もっひとりが立ち上がり、仲間を助けるべく俺にビンタの雨をくれる。「こら、無駄な抵抗はするな。尻だ。素直に尻を見せろ。尻尻」俺は尻を連呼した。

と、キッチンのドアががちゃりと開いて、オヤジが顔をのぞかせる。額には玉の汗。

「なんじゃ。騒ぞうしい」

「尻だ尻だ尻だ、尻」

オヤジに一瞥をくれたのが間違いの元だ。暴れるバニーガールの蹴りが俺のみぞおちに入った。

「ぶはっ」急所である。息が詰まって俺は失神しかけた。体をくの字に曲げたまま動けやしない。

バニーガールの二人はオヤジの背後へと隠れてしまった。

「あの世にきてまでセクハラか」オヤジは憐れみに満ちた様子で頭を震る。

「ちがう」俺は脳髓まで痺れるような痛みに堪えながら、否定した。

「あんたらの正体を確かめようとしたんだ」

「正体、とな」

「ああ、そうだ。もしかしたらあんたらは悪魔かも知れない。尻に黒いシツポが」

「ほれ」と、オヤジはfondleをずり下げ、尻をこちらへ向かって突き出した。

発疹だらけで薄毛の生えたそこは汚いことを除けばいたって普通。シツポなんて、ついていない。

オヤジはfondleを締め直しながらぶちぶちと陰毛を引っこ抜く。「疑いは晴れたじやろ」指でつまんだそれをふっと吹いた。「そもそもシツポ云々のその発想なら、影を見れば済むことではないか」

「影、だって」俺はオヤジの陰毛を避けながらき返す。

「そっじゃ。悪魔がうまく化けていても影が正体を」

「あつ」と短く叫んで、俺はオヤジとバニーガールたちの影に視線をやった。

オヤジはオヤジの影であり、バニーもバニーでそのままだ。オヤジは溜め息をもらした。

「だいいち、悪魔とは神の元を追放されて地に堕ちた天使のことをいう。つまりは墮天使。現世に災いをもたらしたり、人間をそのかしたりするのが奴らの役目じゃ。魂と引き換えに願いを叶える、なんて話は聞いたことがある。死んでしまったおぬしの前に現れて、なんの意味がある」

冷静になつてみれば、オヤジの指摘通りである。

俺はテレ笑いした。「あははは。やはり俺は馬鹿だな。軽率に過ぎた。すまんすまん」

「もう少しで料理は出来るはずじゃ」オヤジは邪魔臭そうに手で追いつかう仕草をする。「あつちで待っておれ」

空腹

ふたたびキッチンの中へと入ってドアを閉める。

まったくもってして、とんでもないところを見られたものだ。神と名乗るオヤジに。

俺は慚愧の念とともに元の場所へと戻って行った。

かなりの間隔を置いて隣りに腰をおろしたバニーガールたちに対してもひじょうに気まずい。

後先考えずあんな行為に及ぶべきではなかったのだ。俺は。

本当に俺は俺は、俺は。「うおおおっ」

頭を抱え込んで絶叫すると、バニーガールの二人が体をびくりとさせた。

座ったまま俺から遠ざかって行く。また、尻の確認を迫られると思っただけに違いない。

「もうあんなことはしないから、しないから」俺は掌を立てて横に振った。

バニーガールの二人はじつとこちらを伺っている。すぐにでも逃げられる体勢を取っているのだろう。背を丸めていた。

「なんだ、信用してないのか」俺は今しがたの自分の行為を棚に上げ、少しばかりいらつとした。「いいから、もっとこっちへ座れ」地面をぽんぽんと叩く。

とたんに、バニーガールの二人は半転して斜めにぴょんと跳躍した。金髪をなびかせ、三メートルほど先に着地する。

そして警戒心むき出しのあの体勢。

俺も同じく跳び上がった。「逃げんな、ごらあ」

無言で目を見開き駆け出すバニーガールたち。

俺は四肢を地面へついてから勢いよく立ち上がり、そのまま足をもつれさせてぶっ倒れた。「うおっ」

もう、起き上がる気力もない。

遠くバニーガールの二人が肩を寄せ合って俺を注視している。

コントそのものだ。きゆうに、アホらしくなってきた。

俺は側臥してキッチンを眺める。

オヤジがあの中へ入ってからどのくらい経つのだろう、そう思った。一度外へ出てきはしたものの、かなりの時間をあそこで過ごしている。

俺はただ待つていただけではない。それ以外にもバニーガールたちといういろいろ悶着を起こしたりもした。

腹がへっていると料理が出来るまでの時間がやたらと長く感じるあの錯覚などではない。断じて、ない。

オヤジはいつたい何を作っているのだ。

「その前に」と、俺は声に出した。「なぜあのオヤジはキッチンなんかを出現させたんだ。初めから料理を魔法で出せばいいことではないか」

謎である。答はオヤジにしか分からない。

「ちよくせつきいてみるか。料理がどのくらいまで進んでいるのか、気にもなるし」うううと歯をくいしばってゆっくり起き上がった。同時に、キッチンのドアが開いてオヤジが湯気の昇る皿を片手に小走りでやってくる。

「すまんすまん、待たせたな」皿を前に差し出した。

「なんだ、これは」しかし出来上がった料理を目の前に、俺は憮然とした。

「カレーライスに決っておろうが」

「量のことをいつてるんだ。量のことを」その中型サイズの皿には真ん中にちょこんとライスが盛られており、もうしわけ程度にカレーが掛かっている。固形の具は何ひとつ入っていない。福神漬けすらない。これでどうやって腹を満たせばいいのだろう。無理だ。

「いっしょうけんめい作ったんだがなあ」オヤジは фондシの端をめくり上げ、流れる顔の汗を拭った。「やはりこれだけでは、不満か」

「当たり前だ」俺は喚いた。「いったい今まで何をやっていたんだ。たったそれっぽっちを作るのに、こんな長い時間が必要なのか。嫌がらせか」

「違う。嫌がらせなどではない。ワシはおぬしのためにと料理を」
オヤジが必死に弁明しているそばから皿をぶん取って、俺はスプーン五口でカレーライスを完食した。

「言い訳はいらない。また、作ってこい」オヤジに皿を押しつける。
「飯を腹いっぱい食わせてくれるんだろ。そういうことだったよな。まさか神様が嘘をついたりはしないよな」

「うううむ」オヤジは低くうめいた。「調子が悪いのだが。いや、調子が良いというべきなのか、とにかくもう一度トライしてみる。神の威信にかけて。待っておれ」

オヤジはわけの分らないことを言い残し、キッチンへと引き返して行った。

「まあ、さつきよりはマシになったな。少しは腹に入れて元気が出た」俺はうううんと伸びをしながらバニーガールたちへ顔を向けてみた。

俺の視線に気がついたらしい。バニーガールの二人も俺に顔を向ける。

「なあ、頼むからそんな遠くに行かないでくれよ。疎外感を覚えちゃうなあ。さみしいなあ」俺は舌なめずりしてバニーガールたちへと接近して行く。「お前たちはバニーガールなんだろ。そうなんだろう。俺は客みたいなものじゃないか。優しくというか、サービスとというか、お酌のひとつも」

そうだ、と俺は膝を叩いた。「あのオヤジにねだってビールの一本でもつけてもらおう。さんざんな目に合わされたんだ。そのくらいはOKしてくれるはず」

進行方向をキッチンへと変える。

発狂

「尻の件は水に流して、仲良くしようぜ。一杯やりながら」俺は軽蔑のしかめ面をしているバニーガールたちへ投げキッスをし、ノックもしないでドアを開けた。「おおおい、神様あ。ついでによく冷えたビールを一本めぐん」

中華鍋を火にかけたガス・コンロの近く、下半身を丸出しにして皿の上へ屈んでいたオヤジと目が合った。

「なぬ。ビールとな」口を開いた拍子に肛門から下痢便がぶりばりしやあああああつと大噴出した。皿の縁からぼたぼた溢れ落ちる。オヤジは立ち上がって自分の陰茎をわし掴んだ。

「それなら楽勝、楽勝。いくらでも出る」水切り棚の銀のボウルを取るやいなやそこへ小便をじよばあああああつと大量放出し、得意顔で俺に手渡す。「何杯でもおかわりしてよいぞ」

俺はボウルを壁にぶん投げた。

「ぶぎやあああつ」奇声を発しながら収納庫を蹴飛ばし、カウンタ―・トップのマナ板を横払い、ラックの皿は全部まとめて床で叩き割った。

俺はウンコを食わされていたのである。そして今度は小便を飲まされかけた。発狂寸前だ。

「ふごばがごげつ」と、咆哮さながらの声を上げてオヤジに体当たりする。

「ぶぼつ」オヤジは鼻腔をおっぴろげてロッカーに激突した。

「くそくそくそくそ。糞を食わせやがつて。くそくそくそ」俺は半狂乱で手当たりしだいに茶碗だの割り箸だの調味料だの何だのを投げつける。

「ま、まで。落ち着け。ワシがいつ大便をおぬしに食わせたというのじゃ。言い掛かりじゃ」片腕で防御しつつ、オヤジも空き手を使い床の品々を投げ返して応酬する。

「このごに及んでも、言い逃れをするのか」はあはあと肩で息をしながらオヤジを睨んだ。

今ごろになつてうえつと、嘔吐感が込み上げてきた。

「言い逃れなどではない」憤然としてオヤジは割れた皿に広がる排泄物を指差した。「おぬしに食わせたやつも、ここにあるやつもれつきとしたカレーライスじゃ」

「お前の肛門から出てくるところを目撃したんだ」

「その認識自体が、間違っているんじゃない」

「なんだつてえ」俺は素頓狂な声で眉をひそめる。

「いいか、よく聞け。肛門から出てくるのが大便なのは、おぬしらの世界でのこと」オヤジは人差し指を立てて横に振った。「しかしここでは、つまり神の作る料理とはこういう物なのじゃ。立派な料理なのじゃ」

「ではさつき、俺がまた料理を作るよう命令したら調子が悪いとか良いとか言っていたのは何だったんだ」

「だからあれば」オヤジは面倒くさ気に耳朵をぼりぼり掻いた。「なかなか便意を催さないという意味であつて」

「やつぱりウンコじゃねえか、この野郎」俺はオヤジの頬をつねつて、力まかせに引つ張った。「てめえてめえてめえ」

「ひがあああう」オヤジは俺を突き離す。「便意を催しても便などたれん。料理じゃ。ワシの体の中で料理が出来上がるのじゃ」

「それを料理と呼べるもんか」もう誤魔化されはしない。このオヤジのこじつけをいちいち認めていったら、俺はオモチヤにされるだけだ。二、三步後ろによるめいて、すぐに反論する。「便意を催して肛門から出るのは大便だ。ウンコだ。それ以外の何ものでもない」「食つてそう感じたのか。感じなかったらう。カレーの味しかなかったはずじゃ」

「カレー味のウンコじゃないと、なぜ言い切れる」

水掛け論の様相を呈してきた。

俺とオヤジは額を密着させて睨み合う。ふうふう、ふうふうと互

いの鼻息は荒い。

「なら、食うな」オヤジは駄々っ子のようにむくれて、ぷいっとそっぽを向いた。

「せがまれたって食うもんか。ウンコのカレーを食う奴がどこの世界にいますというのだ」俺は唾を飛ばしながらわめいた。「他の物を作れ」

「他の物、じゃと」

「飯を腹いっぱい食わせて貰えるはずがウンコだったんだ。納得できるわけがない。ちゃんとした物を作れ」

「ならば、ハヤシライスなんてどうじゃ」

「液体以外の物を、つ、く、れ」俺は語句をひとつひとつ強調して言ってやった。

「液体以外の物か。うううん」オヤジはうつ向き加減に考え込んだ。「ならば、あれにしよう」

ガスコンロの中華鍋をシンクへどかし、下の引き出しから土鍋を取り出すと火にかける。

どのような料理を作るつもりなのだろう。なんにしる飯を腹いっぱい食わせて貰った後はウンコカレーの復讐をしなければならない。ぶっ殺してやる。

そう固い決意のもと俺が見ているそばからオヤジは肛門を床へ近づけて、めりめり黒い物体をひり出した。

「ハンバーグじゃ」手づかみで排泄物を俺の口元へ持ってきた。

発狂 2

「死ねえええ」俺はオヤジに殴りかかっていった。

「わっ」オヤジは頭を下げて攻撃をかわし、俺のかたわらをすり抜ける。「な、なんじゃ突然。おぬしが所望した通りの料理ではないか。気でも狂ったか」

「それもウンコだ。固形のウンコだ。ウンコだウンコだウンコだ」
出入り口のところにはバニーガールの二人が鼻をつまんで立っていた。

「そいつらを見る。そいつらだってウンコだといっているようなもんじゃないか」

「臭いがキツいのは床で混ざり合っている調味料のせい。おぬしが悪い」

こくんと頷くバニーガールの二人。なぜコイツらは頑ななまでにひとことも発しようとしなのだろう。よけいにイラッとする。

「なんだとう。あくまでもウンコじゃないと言い張るつもりか。ならばそれを」俺はオヤジの握っている固形の排泄物を顎でさした。

「自分で食ってみろ」

「こんなもの、食えるかあ」オヤジは排泄物を床に叩き付けた。

俺はカウンター・トップの出刃包丁を手にとった。

「早とちりをするでない」オヤジが慌てて説明してくる。「ワシは物を食わんのだ。摂取するのはアルコールのみ」

「じゃあ、そいつらに食わせてみる」俺は包丁の切っ先をバニーガールたちに向ける。

「こやつらに至っては食べ物どころか、アルコールさえも口にせん。何も摂らん」

バニーガールの二人は鼻をつまんだままオヤジの排泄物をじっと見つめている。いかにも汚い物を見る目付きだ。それをウンコと認識しているようにしか思えない。

「よし、分かった」俺は出刃包丁を中段に構える。「言い残すことはないな」

「さ、刺す気か。本気でワシを」オヤジは面食らったようだ。

「ああ、そうだ。何も言い残すことがないのなら」

俺がでつぷりと肥えたその醜い腹に狙いを定め、一步踏み出すやいなやオヤジは威喝した。「それは飯を食う気もないと受け取っていいのじゃな」

「もういい。いらん。食わん。殺す」お前とは何も話す気はないのだというアピールの意味を込め、片言の単語のみを並べて言っていた。

「そうか。飯は食わんか」オヤジは薄ら笑いを浮かべる。「ならばおぬし、餓死するぞ」

「死んだって最初のところに戻るだけじゃないか」俺は包丁でその方角をさす。「今より状況が悪くなることはない。もう、喋るな。うるさい」

「餓死は、苦しいぞ」オヤジは口の周りをべろりと舐め回し、サデイステイクに瞳を輝かせた。「しかも死んだ後に目覚めても腹は満たされておらん。空腹のままじゃ。また苦しみながら死んでいく。永遠に、餓死は続くのじゃ」

「なにっ」俺は目を見開いた。

なんてことだ。そういうふうになるとは夢想だにしていなかった。死んでも元の状態には戻らないのか。だったら今より悪い。

前の状態を引き継いで苦しみ続けるのは、まっぴらゴメンである。

「やつぱり飯を食わせろ」俺はあっさりと翻意した。

「ならば」オヤジは掌を差し出してきた。「その包丁をこっちへ寄越さんか」

俺は自分の握り締めている出刃包丁に目をやった。

これを持ったままだとオヤジは料理を作ってくれないのだろう。料理を作った直後にずぷりとやられたら、たまらない。

いや、それ以前の問題としてこのオヤジが神なら死ぬことはあり

得るのだろうか。死ぬかも知れないし、死なないのかも知れない。まあ、どっちにしるこのような凶器はあまり役に立たない。

死んだってあの場所に甦るだけなのだ。目的は苦痛を与えることのみになる。撲殺のほうが効果的だ。

それに包丁を寄越せとの要求は、今度こそまともな料理を作る意思表示なのだろう。

俺は長考したすえオヤジに従うこととした。

「ほらよ」出刃包丁の柄の部分の掌に置いてやった。

「うむ。よろしい」オヤジはシンクの排水口に角から突き刺さっているマナ板を引き抜き、包丁ともども水洗いしてカウンターへと並べた。

そして壁のフックに掛けてあったフライパンを空いている方のガスコンロで火にかける。

フンドシをずり下げ屈み込んだ。

「さて、何が食いたい」

かっとな頭に血がのぼって俺は一瞬目の前が真っ暗になった。

「その鍋だのフライパンだのマナ板だの包丁だのには、いったい何の意味があるのかな。さつきから」必死に平静沈着さを取り繕う。「料理を作るのに必要なのじゃ」オヤジはきよとした顔で瞬きをした。「当然じゃろう」

「使っていないよな、それを。ぜんぜん」だんだんと声に怒気が帯びてくる。爆発間近だ。「その、神の、料理法、じゃ」

「だから鍋やフライパンを火にかけ、マナ板と包丁を所定の位置にセッティングして初めてワシの体の中で料理が出来上がる仕組みなのじゃ」

すううう、はあああと俺は深呼吸をした。目を閉じて胸を押さえ、気を静める。

発狂3

「米はどこにある」キッチンの中をぐるりと見回した。

炊飯器や米櫃の類が、どこにもない。

「カレーとハンバーグと、それとあと」指折り数えてメニューを並べ立てるオヤジ。

俺は頬のびくびく痙攣する作り笑いをオヤジに向けた。

「オカズはいらない。米だけで、じゅうぶんだ」

「なんと。おぬしがごちそうを望んだのではないか」オヤジは責めるように言ってきた。

「俺にとつては白いおまんまが何よりのごちそうなんだ。オニギリにする。塩ふって食う」

「ならば、最初からそう注文すればよかったのだ。ムダに疲れさせおつてからに」オヤジはふくれ面をして屈んだまま半回転し、尻を高くもたげてそこに点在する赤いぶつぶつを指でつまんだ。「ほれ、好きなだけ食え」

ぶちゅぶちゅぶちゅと次々に白い膿が押し出されてくる。大きさは米粒と同じくらいで、形もそっくりで。

「ひゃあ」俺は悲鳴を上げて嘔吐した。「うげえええええつ」

米はオヤジの膿だったのである。膿にウンコを掛けたカレーライス。想像を絶するゲテモノ料理。

これは胃の内容物をぜんぶ吐いても吐き気は収まらない。俺は隅のゴミ箱に顔を突っ込んでげえげえ言い続けた。

ビニール袋の底に溜まった胃液の臭いがつんと鼻をついてくる。気分が悪い。しかし、何も食わなきゃ俺は死んでしまうのだ。餓死の連続で永遠に苦しみ続けることになるのだ。

後ろで心配そうに立っていたオヤジとバニーガールの二人をかき分けて、俺はガス・コンロの近くまで行った。

床にはオヤジに投げつけた皿だの調味料だの何だのが広がって

る。マヨネーズと醤油とサラダ油が混ざり合っているところは、幸いウンコ膿カレーに侵蝕されていない。

俺はそれを両掌ですくってべるべる舐めた。「うえっ」

またしても嘔吐感が込み上げてきた。が、そんなこととしてなるものか。両掌の調味料をぜんぶ口の中へ入れて水道水で胃に流し込んだ。

ものも言わずに俺を目で追っているオヤジとバニーガール二人の横を通り過ぎ、キッチンの外へ出る。

「おい、どこへ行くつもりじゃ」

キッチンとあの黄金色の扉のちょうど中ほど辺りで、背中にオヤジの声が飛んできた。

俺は後ろ手を振った。

「おい、答えんか」オヤジはしつこい。延々ときいてくる。「答えんか。答えんか。答えんか」

「帰るんだよ」俺は立ち止まって振り返った。

「どこへじゃ」

「元いた世界へだ。最初に目覚めた場所、あそこへ行けば帰れるかも知れん。何かしらヒントが得られるはず。もう、こんなところにはいたくない。お前らといっしょにいるのは懲りゴリだ」

ふたたび歩き出した。

「おい、待て。待たんか」またオヤジの声が飛んでくる。狼狽えた調子だ。「お前ら、あいつを捕まえる。捕まえてこい」

ぺたぺたと、足音が近付いてくる。明らかにバニーガールたちのものだ。

俺はクルリと半分回って大股開きに静止した。

爪を立てて両の腕を振りかざし「がおおおっ」と、歯を剥いてみる。

びくつとしてバニーガールの二人は固まった。効果てきめんである。これまでの経緯で俺に対しての恐怖心が植えつけられているのだ。

二人は青白い顔を見合わせる。

「何をしておるのだ。追いかける。捕まえろ」

バーナールたちはオヤジと俺を交互に見やる。まごまごしているばかりで、いつこうに追いかけてくる様子がない。

「へっ」と、俺は嘲笑した。

扉は目前だ。いつの間に閉まったのだろう。足を速めた。

危機

「ふんぬばら」と、オヤジの叫び声。パチンと指を弾く音がする。「地面よ、取りモチになれ」

「うわっ」右足の踵が上がらぬまま踏み出した左足も地面にくっついて、両膝、両手の順に崩折れた。べちよっと、ねばねばの触感。犬のような格好で動けやしない。地面が強力な粘着性の糊になっている。あの魔法だ。

「くそう。てめえ何をしゃがる。はやくこれを」俺はめいいつぱい首を後ろへねじ曲げた。「どうにか、し」

オヤジとバニーガールたちも地面に倒れていた。三人とも顔だけこつちへ向けてうつぶせに真っ直ぐ体を伸している。川の字だ。

オヤジはばつが悪そうに言う。「助けて」

「お前もかああ」両の手足が地面に固着していなければいちメートルほどは飛び上がったに違いない。俺の背中がどくんと突き上がった。「ま、魔法で取りモチを消せ。地面を元に戻せ」

「無理じゃ。手が動かせない。指をばちゃんと弾けない」

「なんだってえ。あれは指を弾かないと出来ないことなのか」

オヤジは俺の質問に答えず遠い目をした。

「ワシら、このまま死んでいくんじゃない」

「なんで地面をぜんぶ取りモチなんかにしたんだ。自滅じゃないか。馬鹿かお前は」

「気が動転しておったのじゃ。だからとつさに地面よ取りモチになれなどと叫んでしまった。言葉が足りなかった。おぬしの足元の地面、と言うべきじゃった」

ぐっと、俺は唇をかんだ。

オヤジは情けなく目尻をたれ下げている。

その両側のバニーガールたちも似たような表情。泣きそうだ。

「まあ、これも死ぬまでの辛抱じゃ。そうすればここから開放され

る。別のところで甦る」オヤジは暗然と言った。「いつこくもはやく死ねるよう、神に祈ろう」

「お前のくだらない冗談はいいんだ。お前が神なんだろうが」俺はがなり立てる。「神なら真面目に考えろ。この窮状から脱する方法を」

「何も思いつかん」オヤジは逆ギレしてきた。「自分で考えろ」

「お前のせいでこうなったんじゃないか。ふざけるな。死に至るまでは苦しいに決っている。このままいけば餓死だ。神が不注意で人を殺してもいいのか。よくないだろ。ダメだろ」

「そんなもん、関係ない。思いつかんもんは、思いつかん」ぺっぺつぺつと、この距離で届くわけがないのにオヤジは俺めがけて唾を吐いてきた。

こんな醜行、小学生でもしやしない。コイツは本当に神様なのだろうかと、また俺の頭の中に疑念が湧いてきた。

いちおう不思議な能力を有しているのだから、人間ではない。人間ならば最初のあの空中浮遊の時点で……。

「あつ」と、俺は声を上げた。「お前、空中浮遊をしろ。空中浮遊を」

「それはやって見せたではないか」オヤジは生気のない半眼だ。「もう、なんだか疲れた。寝る」「おい、寝るな。あの空中浮遊は指を弾かなくても出来るよな。たしか弾かなかったはずだ。答える」

「あれは、念じるだけでいい」

「だったら今すぐやれ。空中に浮き上がって、それから俺たちを助ける」

「あつ」今度はオヤジが声を上げた。「なるほど。その手があったか。うむ。おぬしは賢いぞ。よし、ならば」

めりめりめりと剥離音を立てて、オヤジが宙に浮かび始めた。

体と地面をつなぐ取りモチの糸がぶちぶち千切れていき、完全な自由の身となるやいなや瞬く間にはるか二十メートルほどの高みへと達する。

オヤジは上空から俺に手を振った。破顔一笑だ。

「おぬしらもこい」　そう言うなり、俺とバニーガールの二人も浮び始める。

俺の靴が脱げ、つづいてズボンの膝が破れた。下半身から浮き上がったのだ。

残りは両の手。逆立ちの状態である。

「ぎゃあああ。痛い痛い」激痛が走った。目に見えぬ物凄い力で上へ引つ張られているのだ。俺の掌の皮膚が剥がれるのが先か、取りモチが切れるのが先かといった感じである。「魔法で助ける。地面を元に戻せ」

鼻歌をうたいながら上半身でリズムを刻んでのりのりのオヤジ。

俺の言葉など耳に入らぬといったふうだが、本当は聞こえているに違いない。自分が空中浮遊をする際に痛かったから、俺も同じ目に合せようとしているのだろう。

ところどころに取りモチの付着したオヤジの体は赤く腫れていた。
「うぎゃあああ」

そしてぶちぶちぶちと取りモチの千切れる音がして、俺はオヤジの横へ至る。

慌てて掌を確認した。もしかしたら皮膚や肉が剥がれたかも知れないと思っていたが、幸いにも無事である。オヤジと同じく点々に取りモチが残って赤く腫れているだけだ。

少し遅れてバニーガールの二人も飛んできた。頭と両の手足を地上に向かつてぐったり垂らしている。レオタードと網タイツの前部が破けていて、半裸に近い。

正気に戻るとすぐに胸と局部を手で隠し、俺を軽蔑のまなざしで見つめてきた。

「俺のせいじゃない。コイツだ、コイツがやったことじゃないか」
オヤジを指差して訴えた。

しかし、バニーガールの二人はますます俺に対して軽蔑心を抱いたらしい。眉間が曇る。濡れ衣だ。

「何でそういう対応なんだ。どんな理屈だ。衣装が破れたのは取りもちでだろ。それを出現させたのはオヤジだろ。オヤジのせいだろ」と、ぜんぜん難しくないことを噛んで含んでやっているそばから、またしても俺は目に見えぬ強い力で引っ張られた。横に引っ張られ続けた。「うわあああああ」

飛行である。前方三メートルくらいのところにオヤジの尻があった。フンドシからは金玉がハミ出していた。

「楽しいなあ。楽しいなあ」

「おい。この飛行には何の意味があるんだ。降ろせ、降ろせ、降ろせ。地面を元に戻してからゆっくり降ろせ」

「楽しいなあ。楽しいなあ」

無視だ。いや、これは本当に聞こえていないのかも知れない。

オヤジを先頭にして俺、バニーガールたちの順で空中を旋回し続ける。地面スレスレまできてまた上昇するあの芸当もセツトだ。

「うわあああああ。ぎゃあああああ。やめろやめろ。降ろせええっ」だんだんとここがどこなのか、自分が何をやっているのかも分からなくなってくる。

頭の中に靄がかかっていく……。

脱出

「う、うううん」気がつく、俺は地面に横たわっていた。

さっそくオヤジの顔が目飛び込んでくる。人工呼吸はされていない。オヤジも横になって互いが向き合うかたちだ。

暗澹とした気持ちになった。意識が戻って目を開くまでのわずかな間、ここは生前に住んでいた自分の家のような錯覚があったのである。二十四年の習慣であろう。

しかし、全て夢ではなかったのだ。事故に遭ったことも、恐怖の空中浮遊も、オヤジに押し潰されての接吻も、バニーガールたちとの悶着も、ゲテモノ料理も、取りもちも、何もかも。

上半身を起こしてみるとオヤジの後ろでバニーガールの二人も寝息を立てていた。破けていたはずの衣装は俺の服やズボンと同じく元に戻っている。

地面も、だ。あの強力な取りもちはどこにもない。オヤジや俺やバニーガールたちに付着していたやつまでも。赤い腫れだけが少し残っていた。

「がああ。がああ」と、オヤジはイビキをかいて寝返りを打つ。あんぐりとした口の奥で喉チンコを震わせ、ヨダレの糸を引き、鼻水まで垂らしていやがる。なんたるアホ面。

俺はむかつとした。今までの経緯もあって殴打の衝動に駆られたが、それをすんでのところで我慢した。

「もうコイツらと関わり合いになるのはヤメだ」かたわらに転がっていた靴を履き、黄金色の扉から外へ出る。「じゃあな。バニーガールたちと糞オヤジ」

糞オヤジとはなかなか巧いことを言うな、などと心の中で自賛しながら扉を閉めた。お別れである。こんりんざい会うものか。

「このまま真っ直ぐだな、真っ直ぐ。最初に目覚めた場所は」二、三步ほど進んで、あることに思い至った。立ち止まる。「食べ物

持つてくりやよかったかな」

食べ物とはオヤジの排泄物のことではない。調味料だ。あれもいちおうカロリーにはなる。まだ口に出来そうなやつが残っていた。床で混ざり合っただけで、嘔吐感を催すほどの味であるうがなよりはマシ。また腹が減る可能性は大なのだ。

俺はくると方向転換して、舌打ちした。「ちつ。やつちまった」
黄金色の扉は閉まっている。自分で閉めたばかりだ。それが、いけなかった。

黄金色の扉にはノブがついていない。さらに枠組みと扉の隙間さえもない。外からどうやって開ければいいというのだろう。

ためしに押してみた。が、やはり開かない。

「しょうがないな。ここから飲まず食わずで行くか」俺は諦めた。
「オヤジとバニーガールたちを起こして中から開けてもらうわけにはいかないし。そんなことしたら逆戻りだ。酷い目に合ってしまう。キッチンで摂取したマヨネーズと醤油とサラダ油の混合調味料、あれのカロリーだけで頑張ろう。元の世界に帰れたらマトモな飯を腹いっぱい食えるんだ。そうでなければ、餓死するのだが……。あの世で命掛けだな」

俺は黄金色の扉から遠ざかりつつ愚痴をたれる。

「だけど、なんで俺がこんな目に合わなきゃならないんだ。車にはねられただけじゃないか。不注意ではあったが、死んでしまったのはこっちの方だぞ。誰も巻き添えにはしていないし」

だんだん腹が立ってきた。ここへやってきてからというものの泣いたり怒ったりばかりで、ひとつも楽しいことなんかありやしない。まさに虐待。虐待につぐ虐待である。

生き返れるかどうかは分らないが、とにかくここからはいつくもはやく脱出するよう努力しなければ。

「ん。なんかずっと向こうに光が見えてきたな」俺は歩きながら手底をかざした。「なんだあれは」

自然と速足になる。それは、だんだんとかたちをとり始めてきた。

「あつ。扉ではないか。銀色に発光しているぞ」ついには駆け出した。希望の光である。あそこがあの世と現世をつなぐ扉かも知れないのだ。「やったあ。やったあ」

そこへ近づけば近づくほどに加速していった。陸上競技でなら世界記録を出していたことだろう。

「もうすぐだ。もうすぐだ」

しかし、いったいここはどういう仕組みになっているのだ。俺が最初に目覚めた場所はまだまだ先のはず。

あの銀色の扉はその中間地点くらいではないのか。あんなものは、ぜったいになかった。

だいいち、あの世に扉がある意味も分からない。そんな教えを説く宗教があつただろうか。少なくとも俺は知らない。

あの世で気絶したり死にかけたりなどの肉体的反応もおかしいが、神様のイメージもまるで違う。あのオヤジがそうだとするならば、罪もない者を虐げるのが神なのか。

いろんな疑問が湧いてきて、その答を考えているうちにとうとう俺は扉の前までやってきた。

「はあはあ。はあはあ」こんなに走つたのは何年振りであろう。脇腹が痛い。

「ここにもノブはついていやがらない」俺は顔を歪めて言った。「だが、ここは押せば開くことだつて有り得る。開き戸と決めつけるのは早計だ」

祈るような気持ちで手を伸していく。

扉がばたああああんと凄まじい音を立てて勢いよく開いた。

「ひゃあ」あやうく突き指をするところであつた。いそいで引つ込めた手を俺はまじまじと見つめる。

奥の方から聞き覚えのあるドラ声が飛んできた。

「はやく中に入ってこい」

覗いてみると、あの神を名乗るオヤジの姿。胡座を掻いて両側にバニーガールを従え、仏頂面で手招きしている。

俺は力まかせにばたああああんと扉を閉めた。ついでにどこかんと蹴りも入れてやる。

「くそ。本当にここはどうなっていていやがるんだ」俺は肩をそびやかして大股に前へ前へと進んで行った。「なんで銀色の扉の中にオヤジとバニーガールたちがいたんだ。先回りされた覚えは、ないぞ。こんなところで追い越されようものならすぐ気がつくに決っている。地下通路でもあるのか。いや、魔法か」

振り返ってみると、あの銀色の扉は遥か彼方。

歩きながら目を右や左にきよるさせる。オヤジとバニーガールたちの姿はない。

感覚的にいつて俺が最初に目覚めた場所はこの辺りだったのだろう。そう思った時、またもや前方に光が現われた。

「ん。今度のは赤い扉か」俺は悪い予感に襲われながらも駆け出した。

他に行く当てなんてない。あれに望みを託すしかないのだ。

「はああああ」

そして息も絶えだえそこへ到着すると、図ったかのように扉は中からばたああああんと開いた。

「おい。はやく」

俺はオヤジの言葉を最後まで聞かずに扉をばたああああんと閉めた。

ばたああああん、ばたああああん、どかんどかん、ばたああああん、ばたああああんとやかましいこと、この上ない。耳鳴りがする。

再会

それからも一定の間隔を置いて次々と扉は現れた。

黒い扉や白い扉、青い扉や緑の扉、茶色い扉もあればピンクの扉もあった。およそ考えつく限りの色の扉だ。

自分からその数々の色の扉を開けたことは、ただの一度もない。

扉は俺が近づくとかならず中から勝手に開いた。

そこにはオヤジとバニーガールたちがいた。

「おい、はやく中に入ってこんか」第一声はこれである。

拒否し続けた。今までの経験で中へ入ればまたヒドイ目に合うのは、明らかだったから。

しかし、忍耐にも限度というものがある。体力もなくなってきた。神を名乗るオヤジは飽きてきたのだろう、扉の中で変顔をするようになった。

べろりと舌を出して耳朵を引っ張ったり、頬を膨らませて黒目と黒目を寄せ合ったり、瞼を押して裏側で赤い小さなコブを作ったり、負けのみえた根比べ。けっきょく俺には脱出方法が分からない。

この世界を律しているのがあのオヤジなのは、間違いないのだろう。ここにいるのはオヤジとバニーガールたちと俺だけだ。

ここ、つまりあの世をぐるっと一周したのか何なのか久方ぶりに黄金色の扉が現れた時、俺は中へ入る覚悟を決めた。

「おい、はやく」のオヤジの言葉に従った。

「元の世界に戻せ。俺を」オヤジの目の前まで行って単刀直入に切り出す。よけいな話をする気は、毛頭ない。

胡座を掻いたオヤジは両の手の指先を頭頂につけ、腕で輪っかを作っている。白目を剥いていた。まだ変顔でウケを取れると信じているのか。

俺はオヤジの額を軽くこずく。

ダルマの如くごろんと後ろにひっくり返えるオヤジ。それでも変

顔と腕の輪っかは崩さない。粘り続ける。

バーナードたちのほうが痺れを切らして、右と左からオヤジを抱き起こす。

「ごほんとひとつ咳いてオヤジは頬を赤く染めた。ギャグがすべったことを照れているのだろう。」

「あん、何だつてえ」おかしなアクセントのソプラノ調できいてきた。

ウケ狙いを諦めていないらしい。耳まで真っ赤かだ。

俺も上目づかいで鼻にシワを寄せ、齒を剥き出した変顔で對抗する。これはウケ狙いではない。相手を愚弄した表情のつもり。

不快感でオヤジがくだらないギャグを止めると思ったのだ。人のふりみて、我がふり直せ。

が、意に相違してオヤジは爆笑した。

「うわはははははははは」

俺はオヤジに殴りかかって行つた。

「元の世界に戻せ、戻せ、戻せ」

これでいったい何度目の戦いになるのだろう。覚えていない。俺とオヤジは地面の上をくんずほぐれつ揉みくちゃになつて暴れまわった。

バーガーたちも参戦してくる。もはや乱闘だ。俺が誰を殴ったのか、誰に殴られたのか判然としない。

疲れが怒りを上回って俺たちの戦いは終了した。

四人が車座になつて喘ぐ。バーガーの二人は鼻で「ふうううん、ふううん」いつている。

殴り合いをしている時には脳内で分泌されるアドレナリンの影響で感じなかったのだが、今は体中のあちこちが痛い。

「はあはあはあ」俺は才ヤジを睨みつけた。

「はあはあはあ」と、オヤジはうつ向いたまま。俺の視線にも気がついていない。

次に俺はバニーガールたちを睨みつける。「はあはあはあ」

目の周りに青痣を作ったバニーガールの二人は俺の視線に気づいて、びくつとした。瞳に怯えの色が浮かんで、胸と股を手で覆う。

俺のはああああを性的興奮と受け取ったのだろう。

俺はがくつとうなだれた。

「なあ、本当に頼むよ」オヤジの側までいざり寄って、土下座した。「はああああ」と、荒い息づかいが聞こえてくる。

顔を上げると遅ればせながらオヤジが俺を睨み返していた。「はああああ」

鳥肌が立つ。まるで俺に発情しているみたいだ。これは二度目か。四つん這いで俺に迫ってきた時と合わせて。

バニーガールたちの気持ちがよく分かった。

「はああああ」オヤジは舌舐めずりする。

横座りで妙なしなを作って、俺にウインクしてきた。唇を尖らせる。

俺は殴りかかって行っただ。

「ギャグなのか本気なのか、何なんだあ。お前はあああ」

すかさずバニーガールたちがこれに加わった。またしても乱闘だ。彼らは半笑いである。楽しんでいるらしい。

俺ひとりが馬鹿をみているようだ。

乱闘直後の乱闘。体力が続かない。俺たちはすぐ大の字になって寝そべった。

「真面目に話し合おう。大人になろう。もう暴力も悪ふざけも止めにして」俺は苦しい息の下から言った。

「ワシはいつだって真面目じゃ」バニーガールたちに怪我の具合をチェックさせながらオヤジは答えた。

側頭部の髪の毛をぐしゃぐしゃに乱した青タンだらけの顔で、鼻血まで流している。それでいながら敵とした表情なのだ。

ギャップがあつて、これがいちばん面白い。ほんらいなら腹を抱えて笑っていたはずである。

が、今はそれどころじゃない。そんな余裕はない。ここから脱出

しなければ。

「なら、現世へ戻るにはどうしたらいいんだ。教えてくれ。戻れるんだったら、何でもする。ウンコ膿カレーを百杯食ったっていい」

「何でもするじゃとう」オヤジの目がきらりと光った。

嫌な予感がした。

「何でも、つてのは言い過ぎた。たいがいのはする」俺は急いで訂正した。

このオヤジのことである。何を言い出すか分からない。物理的にも精神的にも不可能な交換条件を持ち出しかねない。非常識な奴なのだ。

オヤジは言う。

「バニーたちとの勝負に勝てば、元の世界へ戻してやってもいい」

「勝負、だつてえ」

勝負

ぱつと頭にかけてっこれが思い浮かんだ。童話のウサギと亀である。俺は亀じゃないが。

「かけっこではないぞ」心の中を読んだのかどうなのか、オヤジは間髪いれずに俺の連想を否定した。「まあ、スポーツではあるがの」「何のスポーツだ」俺は勢い込んだ。

女と肉体的に競い合うのなら、こっちに分がある。

バニーガールたちの身長体重は平均的な女性のそれだ。むしろ胸やお尻がグラマスなぶん、普通の女性よりは運動に不向きであるう。今まで動きを見てきたが、きつと特別な運動もやっていない。目立った筋肉もない。

勝てる。二対一でも。

「アイスホッケーのようなスポーツじゃ」オヤジは足元を指差した。「ほい」

ぼわんと煙が立ち昇る。

そこから木製のスティックが現れた。なるほど、形も大きさもアイスホッケーの道具にそっくりだ。先のほうがL字に曲がっている。つづいて遠くを指差すオヤジ。「いでよ」

向こうでも煙と共に何かが現れた。

「なんだ、あれは」俺は爪先立って目を細める。

「このスポーツに使うゴールとボールじゃ」

煙が薄まってくると、赤と青の二つのゴールが確認できた。その中央に白線が引かれてゴム製なのだろう直径七センチほどのボールが置かれてある。

たしかこの魔法は指を弾かないと使えないのではなかったか、なとも思っただが、もうそれはどうでもいい。

このオヤジのことだから、そこを突っ込んだらまた何かてきとうな応答をするに決まっている。今、出来るようになったただの何だの。

オヤジのルール説明に聞き入る。

「赤いゴールがバニーで青いゴールがおぬしじゃ。白線を挟んで対峙し、笛の音で試合を始める。そのスティックで相手のゴールにボールを叩き込んだら一点。ゴールを決めたら白線に戻って笛の音で試合再開。これの繰り返しじゃ。試合は二時間でたくさん点を取ったほうの勝利。かんたんじゃろ」

「たったそれだけか」俺は胡散臭さげにたずねた。

「そうじゃ。ただし」オヤジは横目に俺を見据える。「男と女。しかも初心者同士。ハンディーキャップはつけさせてもらう。おぬしは一人でバニーは二人じゃ」

いいな、というように俺を正視してきた。

俺に否応はない。

「やるしかないんだろ。やって勝たなきゃ現世には戻れないんだろ」オヤジは黙って尊大な調子で頷いた。

「では、さっそく始めるとするか」スティックを手にバニーガールたちを従え、白線へ向かって歩き出す。

「カロリーの補給をさせてくれ。ちよつと待っていてくれ」俺はそう叫んでキッチンへと駆ける。

腹がへっては戦ができない。ドアを開けると、あの混合調味料が残されていた。

「うえっ」俺はそれを貪り舐めた。

この勝負には何がなんでも勝たなければならない。最後のチャンスかも知れないのだ。吐き気に耐えてでも体力の回復をしなければ。そして俺はキッチンを出て、オヤジたちのところへ歩きながら考える。腹をさすって。食後すぐに走るのは無理だというふうを装い。キッチンへ行ったのは、作戦を練るためでもあったのだ。

まず、今の状態ならバニーガールたちと足で競って負けるわけがない。自信がある。

ならばスティックで下手にドリブルはしないほうがいいだろう。笛が鳴ったら力いっぱいボールを叩いてダッシュである。先にボー

勝負2

と同時に、左側のバニーガールがスティックで俺の頭頂部を思い切りぶん殴った。

俺のほうに先にボールを叩いていたのに、何もすることが出来やしない。その場にぶっ倒れた。

足音が前に遠ざかって行って、やがて俺の横を通り過ぎる。

ふたたび「ぴいひいひいひい」と、笛の音。バニーガールたちがゴールを決めたらしい。

今度はゆっくりと足音が近づいてきた。

「ほれ、何をしておる。起きんか」

頭を擦りながら顔を上げると、オヤジとバニーガールたちの三人が俺を見おろしていた。彼らの周りにちかちかと星の幻像が瞬いている。

俺はがなり立てた。

「これはどういうことだ。いきなりスティックで殴られた。正々堂々と勝負するんじゃないかったのか。卑怯じゃないか。ルール違反じゃないか」

「ワシはスティックで相手を殴ってはいかん、などとひとことも言っくらん」

「ぐぎっ」俺は歯ぎしりした。抗議の言葉を飲み込む。

なるほど、確かにひとことも言っていない。俺が甘かった。オヤジの非常識さを完璧には理解できていなかった。

スポーツの概念を捨てるべきなのだ。いや、格闘技もスポーツかならばこれは格闘技の要素を含んだスポーツだ。

「よし分かった」俺は立ち上がる。

先に狙うはボールではなく、バニーガールたち。バニーガールの二人を足腰立たなくなるほど叩きのめしてやる。

笛が鳴る。

「うらあああああつ。死ねえええ」俺はバニーガールたちの側頭部めがけスティックを右から左に横払いした。

が、警戒されていたのだろう。バニーガールたちは笛の音とともに後ろへびよんと飛び退いた。攻撃をあっさりかわされた。

怒りまかせにスティックを振った勢いで俺はぐるぐるぐる空回り。

その隙にバニーガールのひとりが白線上のボールを叩く。

「うぎゃあああ」よろめきつつも走り出し、十数メートルほどのところでようやく平行感覚が戻ってきた。

ボールに追いつく。ゴールはされていない。ゴールとボールの間はほんの二、三十センチ。あぶなかった。

「やはり女ごときに脚力で負けるわけがない。目が回っていても、俺は」敵のゴールを振り返る。

バニーガールが二人がかりでその自分らの赤いゴールを持ち上げ、地面に叩きつけているところだった。

ばらばらになった木製のゴールに瓶の液体をかけ、ライターで火をつける。めらめらと燃え上がった。

「何をしてるんだあああつ」俺はボールを放つたらかしてスティックを高くかざし、バニーガールたちめがけ駆け出した。

逃げ出すバニーガールたち。

笛が鳴った。「ぴぴいいい」

オヤジが俺に武者振りついてくる。

「白線のところへ戻らんか」

オヤジが指差すほうを見ると、俺の青いゴールにボールが転がっている。駆け出した時の風圧か、あるいは我知らずボールを蹴飛ばしてしまったのか。

まあ、そんなことよりもバニーガールたちの赤いゴールである。

俺はオヤジに食ってかかった。

「これから先、どうやって俺はゴールを決めればいいんだ。永遠に無理じゃないか。これじゃあ、競技したいが成り立たない」

オヤジはやれやれといった感じで頭を振る。

「ゴールを燃やしてならんと、誰が言った。バニーたちは賢い。これなら点を取られる心配がない」

「うわあああ」俺は髪の毛をかきむしりながら、その場にうずくまった。「ゴールを出せ。また魔法で出せ」

スティックで地面をばしばし叩いた。L字型の部分がぼきりと折れてしまった。

オヤジが腰を屈めてそれを拾う。

「出来ん。ゴールは一度きりしか出せん」白線のところへ戻って行く。「さあ、試合再開じゃ」

バニーガールたちがやってくると、オヤジは笛をくわえた。

俺も白線のところへ戻って行く。

「このまま勝負を続けて、俺に勝ち目はあるのか」うらめしげな眼差しをオヤジに向けた。

「ない」オヤジはあつげらかと答えた。

「だったら何の意味があるんだ。試合を続けることに。もう決着はついているだろ」

「ルールじゃからの。最初に説明したはずじゃ。このスポーツの試合は二時間。残り一時間三十二分ある」

「どうやっても勝つことの出来ないスポーツを俺はあと一時間三十分もやらなきゃならないのか」とうとう我慢出来なくなつて俺はオヤジの首から下げた笛の紐を捻り上げてしまった。

「よさんか」オヤジは俺を突き離す。「おぬしが大人になろうと提案したばかりじゃろ。それに何もルールに反しておらん。言いがかりの八つ当たり。勝手にルールを誤解しておつてからに。そうじゃろ。責めるべきは自分自身じゃ。勝てないスポーツでもやらなきゃならん。さあ、これを持って」

折れたスティックの先を俺に差し出した。

俺はそれを受け取る。あとは白線の前に膝を抱えてバニーガールたちがゴールを決めるのを黙然と見続けた。

試合開始から二時間が経ったのだろう。オヤジは時計の確認もなしに笛を吹き、高らかに告げる。
「三十九対0。バーたちの勝ち」

勝負3

俺は腰を上げた。「次の勝負もお願いしていいかな。現世に戻りたい。ここは嫌だ。ぜったい、ぜったい、ぜったいに嫌だ」

「その前に」と、オヤジは勝ち誇った顔のバニーガールたちと頷き合う。「罰ゲームじゃあ」

いつせいに三人が踊りかかってきた。

「な、何をするんだあ」

バニーガールたちが右と左から俺の腕を固めて寝っ転がり、オヤジは両足を掴んで広げる。踵が俺の股関に当てられた。

「電気アンマじゃあああ」

今どきこんなことをする奴もいるんだなあと懐かしさを覚えたのも束の間、すぐに激痛が走った。

「うぎゃあああ」

このオヤジ、本気である。「うひひひひっ」

バニーガールたちも実に愉快そう。

「いい加減にしるおお」俺は、声を引き絞った。

オヤジは手を離す。俺の訴えを聞き入れたわけではなく、ただたんに疲れたからだろう。

地面にぺたんと尻をつき、息を切らせる。「はあはあはあ」

バニーガールの二人も地面に伸びて鼻で荒い息をつく。

「ふうううん。ふうううん」

「ふうううん。ふうううん」

油汗を浮かべて上半身を起こしてみると、オヤジが横座りで妙なしなを作ってウインクしてきた。唇を尖らせる。

「勝負、して貰えるよな。罰ゲームを受けたんだ。そんな話、聞いていなかったのに」押さえた股関はじんと熱を持って腫れている。

「いいわ。じゃあ、次の勝負はジャンケンにしましょう」

「ジャンケン、だと」俺はオヤジに訊き返す。

「そうよ、ジャンケンよ。ジャンケンも知らないの」

「グーはチョキに、チョキはパーに、そしてパーはグーに勝つやつなら知っている」いちおうルールの確認をしておく。このオヤジは油断がならない。

「そうよ。それよ」手をぽんと打ち鳴らして、オヤジはまた俺にウインクしてきた。今回のオカマキャラはいつまで続ける気なのだろう。ウザい。「先に三回勝てばいいわ。それで決まりよ。さあ、バニーの中からひとり選んでちょうだい」

「よし、分かった」俺は立ち上がる。「コイツだ」
てきとうに指差した。運勝負なのだから、相手は誰でもいい。

「それじゃあ、バニーちゃんも立ち上がって。正々堂々と勝負するのよ。」オヤジは言う。「最初は、グー」

俺とバニーガールは勢いよく手を出す。俺はグーで、バニーガールはパーだった。

「まずはバニーちゃんの一勝ね」

俺は、ぶちキレた。

「最初はグーだって言っただろうがああ」

「ただの掛け声よ。ただの掛け声」もう、とオヤジは俺の肩を軽く叩く。「だってルールはチョキがパーに、パーがグーに、グーはチョキに」

「すまん。そうだったな」片頬をびくびくさせながら俺はオヤジの説明を止めた。「第二回戦を頼む」

「いいわ。じゃあ、第二回戦ね」と、ひと呼吸置くオヤジ。「最初は、グー」

俺はバニーガールを目潰しするような感じで鋭くチョキを出した。それを見届けてから、ゆっくりとグーを出すバニーガール。後出しだ。

「バニーちゃんの二勝目」オヤジは舐めた指で掌に何やら書く仕草をした。

「なんでもアリだな」出したままでチヨキの形の手がぶるぶる震える。

「なんでもアリじゃないわよ。ちゃんとルールに則って」

「第三回戦だ。頼む」オヤジの言葉を途中で遮った。「さあ。はやくしろ」

怪訝な表情で顔を見合るオヤジとバニーガール。小首を傾げ、肩をすくめ、息もぴったりにくいつと両掌を突き上げた。

これにはさすがに殺意を覚えた。狂ったように自分の骨盤の辺りを乱打して必死でその衝動を押さえつける。

「はやくしろと、言ってるだろうが。聞こえないのか」

「もう、せっかちなえ」オヤジは微笑した。「じゃあ、いくわよ。最初はグー」

とにかく先に出さなきゃ負けない。このジャンケンの必勝法だ。俺は後ろ手を組む。

が、それはバニーガールも同じこと。後ろ手を組んでいる。いつこうにジャンケンをする様子がない。

「はやく出せ」

バニーガールは首を横に振った。

俺はオヤジに向き直った。

「次の勝負を頼む。ジャンケンはおしまいだ」

「なんじゃ。だらしがないのう。勝負を放棄するつもりか」オカマキアラをやめてオヤジが言う。

「あ、ああ」俺は思わず手をほどいてしまった。「これじゃあ、しかたないだろ」

くやしさに握り拳を固めた。

オヤジが、叫んだ。「バニーの三勝目。勝負あり。罰ゲームじゃあああ」

どうやら俺の握り拳に対してバニーガールがパーを出したらしい。俺は電気アンマの餌食となった。怒りも殺意も通り越し、情けなさでいっぱいになった。ぼろぼろと涙が溢れ、頬を伝う。

「もう次の勝負はない。これが最後じゃった」はあはあ息を喘がせながらオヤジは胡座を掻き、額の汗を拭った。

理由

「なあ、何でここには俺とお前らしいないんだ」地面で大の字となったまま俺は素朴な疑問を口にした。「おかしいじゃないか。現世でこれまでに大勢の人間が死んでいる。なのに、誰もいない。俺だけがここでヒドイ目に合っている」

不条理かつ理不尽だ。涙が止まらない。

「他の者たちはそれぞれ現世での行いに応じたところにおる。あの世は、ここだけではない」

「現世での行いに応じたところだってえ。ここが俺にとってそうだと云うのか。俺が現世で、何をした」

「悪い行いじゃ。むろん二十四年も生きていれば良い行いもあるにはあった。が、それは微々たるもの。おぬしの場合、悪い行いのほうが圧倒的じゃった」オヤジは久しぶりに畏怖堂々たる険しい表情となった。

「悪い行いだと。それは何だ。具体的に言ってみろ」怒りの感情がぶり返してきた。

これほどヒドイ目に合ういわれはない。そんな悪事は、働いていない。ぜったいに。

俺はオヤジに抗議してから、また泣き出した。号泣である。情緒が不安定だ。

耳にオヤジの声が降ってくる。

「いや、おぬしはこのような目に合うだけのことをやった」

「やってない。ぜったいに、ぜったいに、ぜったいだ」泣きながらかぶりを振った。「やってない、やってない、やってない」

「やっておる」オヤジは恫喝する。「具体的に言つてやるぞ」

「言ってみろ。何をした。俺は」泣き叫んだ。

「シコった」

「うわあああああ」そのひとことで俺の中の何かがぶつりと音を

立てて切れた。「シコつたら悪いのか。罰を受けなきゃ、ならないのか」

「違う。その後が問題なのじゃ」危険を察したオヤジは素早く俺から二、三步後ろへ退いた。

握り拳で立ち上がった俺はバニーガールの二人に羽交い締めされて、いつそうオヤジから引き離される。

「シコつた後、おぬしは実家の二階にある自室から裏の畑へ精液まみれのティッシュを投げ捨てておったな」安全な距離からオヤジは言う。「ほとんど毎日じゃ。日に四、五回捨てることもあった。猿かおぬしは。年に平均四百七十三回捨てておった。シコるのを覚えた小学校六年の三学期から死ぬまでの二十四才までに。十二年間もじゃ。その間、畑の持ち主はえらい迷惑をしておった。捨てられているティッシュの地点から、ほぼ間違いなくおぬしが犯人と推測はしておった。しかし、証拠がない。いつもおぬしは部屋の電気を消して夜中にティッシュを捨てておったから目撃できぬ。おぬしのところは田舎で街灯も届かず、そのうえ畑の持ち主である老人は視力が低い。近所づき合いだってある。下手に嫌疑をかけて関係を悪くしたくはなかるう。犯人であるおぬしを捕まえることなく、十二年間もイカ臭いティッシュを回集し続けたのじゃ。なぜあのような行いをした。馬鹿め」

「面倒くさかったんだよ」指摘をされると恥ずかしいものだ。このオヤジに一部始終を見られていたのか。「二階の自分の部屋でエロ本をオカズにシコつて、一階のトイレへティッシュを流しに行くのが。ゴミ箱に捨てたら臭いで親とか友達とかにバレるし。だけどたったそれだけの理由で俺はこんなヒドイ目に合わなくちゃならないのか。釣り合いが取れてないだろ。明らかに」

かっかつ、かっかつと顔を熱く火照らせながら俺はバニーガールたちを振りほどいた。

もしかしてコイツらにもあれの現場を見られていたのだろうか。目も合わせられない。

「それだけではないぞ。他にもいろいろやった。罪なことを」オヤジはもうよいといったふうに頷いて、バニーガールの二人を側へ手招きした。

「何だ。他に何をやった。俺は」出来るだけバニーガールたちを見ないようにしながら俺は訊いた。

「電信柱の選挙のポスターにマジックペンで鼻毛やホクロを描いたし、友達から借りたゲームを返さなかったし、酔っ払って飲み屋の立て看板に小便をぶっつけたし、燃えるゴミと燃えないゴミをいっしょにして出したし、人の飼い猫を蹴飛ばしてウサ晴らししたし、それからえっと」

「たまらず俺は半分悲鳴のような、半分怒号のような、そんな声を張り上げた。」

「つまらん理由ばかりじゃないかああ」

「何じゃ。つまらんとは」オヤジは心外そうに眉間を曇らせる。

「ぜんぶだ。ぜんぶだ。罪と呼べるようなものは、ひとつもない」

「いや、おぬしの言動は人に迷惑をかけておる」ピシヤリとオヤジ。

「それすなわち罪なのじゃ」

「誰でもやっているだろ。それくらいは」俺は顔中を口にして喚き立てる。「そんなことすらやっていないというなら、よほどの聖人君子だ。俺は普通だ」

「普通、とな。多くの者がやっていることなら何でも許されるのかのう。そうではないじゃろ」

「何でも許されるとは言っていないだろ。ここまでヒドイ目に合うほどのことを俺はやっていない、ってことだ。何度も繰り返すが」

「たしか中学に入ったばかりの頃」オヤジは片手で目を覆い嘆いた。「バスに乗って小学生料金を払ったこともあったな。中学生は大人料金、小学生は子供料金じゃから。金額が倍も違うから」

俺は地団駄を踏んだ。

「だからたいした罪じゃないだろ。お前の言ってることは。どれもこれもぜんぶ」

「みんながおぬしと同じ考え方ならば、一大事じゃぞ。大人がみな子供料金しか払わなかったらバス会社は潰れる。社員は路頭に迷う」

「中学へ入ったばかりの頃に、ほんの数回しただけだ。だいいちその理屈でいったら何でも大事になってしまう。みんながみんな立ち読みで済ませたら書店は潰れる。働いていた奴らは路頭に迷う」

「悪いことに変わりはないんじゃないのう。罪なことに」オヤジは鼻でふんと笑った。「では、おぬしがここへやってきたのはどうしてじゃ。死因は、何じゃ」

「車にはねられたんだ。赤信号に気づかなかった。不注意だ。それが、そんなにいけないことなのか」俺は激しく抗弁する。「損をしたのは俺だ。痛い思いをしてこんなところにきてしまった。周りの奴らは無事だったはず」

「なぜ赤信号に気づかなかったんじゃ」

「それはパチンコの新装開店が」と、俺はぎくつとした。

我が意を得たとはかりにオヤジがにんまりする。

「そのパチンコをする金、母親の財布から盗んだじゃろ」

理由2

「そ、それは」目が泳いでしまう。忘れていた。

「忘れていたのも、当然じゃ。おぬしにとってそれは日常的なことじゃからの。数日前の朝食を思い出せぬと同じこと」オヤジは俺に近づいてきて、顔を覗き込んだ。「働らきもせず親の金を盗んでギャンブルするのは、たいして悪いことじゃないのかのう。母親は数百円の時給でいくつも仕事を掛け持ちしておったのに。夫、つまりはおぬしの父に死なれた後、家族を養うため必死じゃったのに。おぬし、妹、弟、四人家族か」

「それは、あれだ。反省している」俺はもじもじした。

「いいや。反省などしとらん。ワシに指摘されて仕方なくそう答えているだけじゃ」ぺつとオヤジは唾を吐いた。唾棄である。「この親不幸者め。母親が親戚一同から借金してまで大学へ行かせたのに、けっきよくおぬしは辞めてしもうた。ロクに勉強もせず遊びほうけた挙げ句に。バイトもしとらんかったな。母親からの仕送りに頼ってばかりで」

「ぐつ」と、俺は唇を噛みしめた。

今まで誰かからそれを咎められたことはない。咎められる前に言い訳をして誤魔化していた。生前は、母親の苦労を当たり前だと思っていたのだ。

「自動車の免許を取りに行ったこともあつたな。就職するにしても何にしても必要だとかぬかして。その時も、必要以上に金を要求した。試験に落ちただとか、てきとうな理由をつけては。他にもたくさんある。嘘をつき、母親から金を受け取ったことが。遊びたいがためだけに。母親が汗水流して稼いだ金を」

「すまなかった」俺は力なく呟く。

こうして俺の母に対する仕打ちをひとつひとつ列挙されると、返す言葉もない。俺は、悪いことをした。オヤジの言う通りだ。

「うむ。少しは心が変わってきたようじゃ。自分のしたことを悪いと認識してきた。ワシに指摘されてからではあるが」オヤジは蔑むような眼差しで頷く。

「俺がここでこんな目に合うのは、そういうわけなのか」

「母親ばかりではない」

もはやオヤジが心を読んでくることに何の驚きもない。コイツは神か、そうでなくとも超越的な存在。俺のしてきたことを全て分かっている。「おぬし、近所の個人商店で万引きもしておったろう。仲間を誘って。高校生の頃」

俺はびくつと背筋を伸ばした。人間、自分にとって都合の悪いことはやはり忘れてしまうものらしい。正確には無意識の層に追いつてしまうものだろう。

オヤジに言われるまで、意識の層にはまっただくなかった。思い出した。

「あのおばあちゃん、可哀想になあ。ひとりで頑張って店を切り盛りしておったのに」オヤジは涙を浮かべて、鼻をすする。

「あのおばあちゃんの死因は、老衰なんだろう」俺はおどおどしながら訊く。

「老衰じゃ。しかし」オヤジの涙目に角が立った。「おぬしらの行いが死期を早めたのは、間違いない。非常なストレス。心労。小さな個人商店で毎日のように万引きをされたら死活問題じゃ。実際、あの店は潰れたじやろ。おぬしらのせいじゃ」

それは俺たちも薄々気づいてはいた。ただたんに認めたくなかっただけだ。

万引きは遊び感覚。遊びで人が死ぬわけない、と。オヤジは続ける。

「他の誰かもやるからいいと、あの時のおぬしはそう思っておったな。逆の立場でおぬしが物を盗まれたらどんな気持ちになるかも考えず。大馬鹿者め。あのおばあちゃんは万引きを見つけたら口で注意するだけじゃった。警察に通報せんかった。学校で問題になった

ら若者の将来が駄目になるかも知れん、と。その思い遣りにつけ込んでおった」

これも、凶星だ。何の罰も受けないのをいいことにつけ上がった。

卑怯者である。大馬鹿者だ。俺は。

「在籍していた少年野球チームでは下級生に体罰を加えてもいた。暇潰しに。練習の時の声が小さいとか何とか因縁をつけて。何人かはチームを辞めてしまったな。二度と野球をしなくなった子もおる。トラウマになって。才能があつたのに。付き合う寸前まで行った男女の仲を裂いたのは大学の時か。妬みから。おぬしは妬みの感情を自覚しておらなんだが。笑いながら、冗談ばくそれぞれの悪い噂を流しておつた。あれさえなければ二人は愛し合い、結婚し、素晴らしい人生を送れるはずじゃつたのに。人生が狂つた。狂わされた。人間不信になつてしもつた。おぬしのせいだ。あとは満員電車で屁をこいたこともある。知らんふりしおつてからに。あれは臭かつた」

最後のひとつでまた小さな悪に戻つたような気もしたが、罪は罪である。オヤジは順不同に並べていつてるだけなのだろう。俺の悪行の暴露が時間軸に沿っていないことからそれはいかがえる。子供の頃の悪さから大人の頃の悪さに行つて、また子供の頃の悪さに戻つたり。

まあ、とにかく俺は母親に対する悪行の指摘からは本当に反省していた。今までその悪さに気づかなかつたのは自分自身を正当化するのが巧かつたからだろう。現世では少しの罪悪感もなく生きていた。

オヤジはとどめとばかりに畳み掛けてくる。

「おぬし、女の子をイジメておつたな。名前はあえて言わん。同じクラスで、背が低い少し太つた娘」

罪悪

あつと、俺は声を上げた。次々に記憶が蘇っていく。

「そうじゃ。その娘じゃ」オヤジは爆発しそうな憤怒を堪えるかのように奥歯をぎしりと軋ませた。「何も悪いことなどしていなかったのになあ。あの娘。見た目を理由にイジメられた」

オヤジから剣呑な雰囲気漂っている。

俺は何をされてもいいと思った。それだけのことをしたのだ。半殺しにされたって文句は言えない。

宙の一点を茫然と見つめる。

「やることなすこと全てを貶され、あることないこと言い触らされ、時には軽い暴力も振るわれた。おぬしが首謀者となって。クラスの男子の半数以上が。おぬしらは、笑っていた。あの娘の心の痛みも分からずに」

「最低」と、バニーガールたちが言った。初めて耳にする二人の声だった。

言われるまでもない。俺は最低だ。人間のクズだ。

たしかに中学一年生の頃、俺は同じクラスの娘をイジメていた。

あの頃は、イジメをしているなどという意識はまるでなかった。

彼女を道化扱いして、冗談のつもりだった。時おり見せる悲しい顔に腹が立つたくらいだ。

冗談で傷つくほうが悪いとさえ思っていた。道化とはみんなに笑われる存在、それ以外にアイデンティティーはないのだ、と。

本質はまるで違う。プロの道化は人に笑われているのではない。人を笑わせているのだ。

なにより道化とは自らが望んだ結果でなければならない。地位や名誉や金銭のため。

俺は少しの見返りも与えず彼女にみんなから笑われることを強要した。嫌がっていようが何だろうがお構いなしに。

これは間違いなくイジメだ。

「中学に入ってきたばかりの頃、あの娘は明るかった。おぬしは覚えていないじやろうが。それがイジメで暗くなってしもった。純粋な娘じゃったからのう。心に受ける傷は深い。小学校から上がってきたばかりの子供でもある。まあ、おぬしらにされたことを思えばたいがいのは暗くもなろう。深い傷が残る」

自らの精神を防衛するため巧く押さえられていたものが一気に噴出してくる。罪悪感。罪悪感。罪悪感。

「もう一度訊く、あのイジメの首謀者はおぬしじゃったな」オヤジは俺をぎろりとねめつけた。

俺は黙って頷いた。罪の意識に唇がふるふる震える。

「うむ」俺が事実を認めたことでオヤジはいくらか納得した様子だ。神妙な面持ちで円を描いて歩き始める。「まずおぬしらはあの娘の体つきを貶した。給食のおかわりをあの娘がした時、だから太るんだなどとかかった。あの娘は給食をおかわりしなくなった。それどころか最初に与えられた分まで残すようになった。食べるとまた何か言われるに違いないと、びくびくしておったんじゃ」オヤジは喉の奥で痰をからませ俺に向かって吐きかけ、止めた。

痰を吐きかけるにも値しないということなのだろう。その通りである。

「フォークダンスではおぬしらが大げさに騒ぎ立てた。あの娘と手をつなぐのは汚い汚い、と。あの娘は悲しそうにうつ向きながらフォークダンスの輪をぐるぐる回っておったな。手を下げたまま。このようなイジメは、他にいくらでもある。しかもおぬしらは賢かった。先生に注意されることはあっても、職員室へ呼び出されるようなことはなかった。精神的な苦痛を与えるのがほとんどで、教師にはいき過ぎた冗談にしか見えなかった。肉体的なものはふざけた感じで執拗に肩を軽く叩くくらいじゃった。ブスだのデブだの悪口を言いながら。遠目には仲が良く映ったりもした。そもそも悪口じたい、どこからどこまでがイジメの領域に入るか微妙なもんでも

あるしな。たとえば親しい者に馬鹿だの不細工だの言うのと、そうでもない者に言うのとではぜんぜん違う。言われる者の心次第じゃ。おぬしらはあの娘が傷ついているのを分かっているがやり続けた。またあの娘は先生に助けを求めなかったし、人前で涙も流さんかった。家では毎日泣いておったが。つまりおぬしらは何のリスクもなくあの娘をイジメておったのじゃ。まあ他の者たちは中学を卒業後、イジメたことを凄く後悔しておったがの。それで罪が消えるというわけではないが。その罪に対する罰は、しっかり受けてもらうが。おぬしよりはマシなあの世で。周りで黙って見ていた者たちも含め」

「この人、死ねばいいのに」と、俺を指差してバニーガールたち。俺はオヤジの足にしがみついた。

「あの娘に会って謝りたい」俺は心の底からそう思ってた。「ふたたび現世に生を受けることって可能なんだろ。そういう教えを説く宗教は多いはずだ。今までは無神論者だったが、そうしてくれるのなら信じる。このままじゃ死んでも死にきれない。あの娘に出来るだけの罪ほろぼしたい」

「生き返っても、その望みは叶えられんぞ。ぜったいに」オヤジは断言した。

俺は戸惑った。意味が、分からない。オヤジは長大息する。

「あの娘は、死んだ。おぬしが車にはねられる前の日に。自殺じゃった」

俺は、固まった。

「原因はおぬし。おぬしからイジメられてあの娘の人生にヒビが入り、そして、壊れた。優しい娘じゃったからのう。イジメられるのは自分が悪いからだと思っとった。生きていることに罪悪感を持つて、ついには自ら命を断った。苦しんで苦しんで、苦しみ抜いた末にじゃ」オヤジの目は凄まじい悲しみと怒りで真っ赤に充血している。その目で俺を睨んだ。

「死んだのなら、あの娘のいる場所を教えてください。連れて行ってく

れ」血の気が引いていく。俺は、目眩を起こした。「そこで罪を、償わせてくれ」

「それはならぬ。だいいちおぬしと会ってもあの娘の心の傷は癒されん。悪化するだけじゃ。ますます自分を責める。あの娘は生前も死後も真に心優しい者なのじゃ。おぬしとは違う」オヤジはこれまででいちばん大きな声を張り上げた。

「母や、その他の人たちにも謝りたい。罪ほろぼしがしたい」俺は悄然と言う。「俺のせいで不幸な思いをした全ての人々に」

「黙れ。自分で罪が償えるというその考え方じたいが、おこがましい」オヤジは一喝した。「おぬしは何も心配せんでいい。ぜんぶこつちが決める。ちゃんと因果応報にしてやるぞ」

「自分は、何をどうすればいいのですか。どうすれば全ての罪を償うことが出来るのですか」俺は敬語を使った。

崩折れるようにひざまづき、胸の前で手を握り合わせる。

「かんたんな答じゃ」宙に浮かび上がり始めるオヤジ。

俺に向かってぱちんと指を弾く。俺も宙に浮かび上がり始める。

オヤジはフンドシから素早く金玉をハミ出させた。きつとこれまでの空中浮遊の時もバレないように自分でそうしていたのだろう。実に手慣れたものである。

しかし、俺には怒りの感情などあるわけがない。オヤジの下に漂いながら次の言葉を待つ。

オヤジは俺を見おろした。口を開く。

「ずっと、ワシらといっしょにおるんじゃ」不気味な笑みが浮かんだ。

「最低。死ねばいいのに」地上からバニーガールたちの声。

二人の顔にも不気味な笑みが浮かんでいる。

「言つとくがの、おぬしはヒドイ目に合ったヒドイ目に合ったと喚いておったが、あんなの序の口。その無限倍数分ヒドイ目に合ってもらふ。これからは、手加減なしじゃ」

言い終わると同時にオヤジと俺は空中を旋回した。

「うひひひひひひつ」オヤジは物凄い量の大便と小便をする。いっつこうに止まる様子がない。

そのほとんどが俺に直撃してくる。

ここはあの世だとのオヤジの言葉が思い出された。自らを神だとも名乗った。

このオヤジが神ならば、現世で人間が作り上げた概念とは相当にかけ離れている。

しかし、死後の世界の概念のひとつは現世で人間が作り上げたものと同じだ。

概念のひとつ。　そう、ここは地獄。

地獄に俺はずっといるのだ。オヤジと二人のバニーガールと俺だけのこの世界に……。

どんなにかかっても決して消えることのない罪を背負って。

【完】

罪悪（後書き）

よろしければ感想をお願いしますm（　　）m
良かった点や、悪かった点など、お気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8614b/>

あの世

2010年10月8日14時39分発行